

「それで……御容態は？」

それがやつとだった。

「いのちに別状はないそうだ。……京都の旅館で飲んで、近くの病院に収容されているらしい」

「何時ですの、それ？」

「発見されたのは昨日の夕方らしい。なに、本気だったかどうか、僕への腹いせに違いない」

「そんなことおっしゃるものじゃないわ
その声が震えていた。」

「ともかく、直ぐお発ちにならなければ……」

「うむ、……実家の父親から、来るには及ばぬ、と拒否されたよ。お前なんかには用はないとき」

「だからって……行かないわけには……」

朝の洋定食が運ばれて来たが、フォークもそのままになっている。耕之輔はグラスの水を一気に飲み干した。

「怒鳴るばかりで話にもなにも……。清水に代わって貰うように頼んだが切られてしまった」

「とにかく、もう一度電話を……」

「悪いが、君ひとりで食べててくれないか」

「嫌です！」

阿紀の方が先に立ち上がっていた。

天災にも似て突然襲ってきた事態にどう対処してよいのか分からない。ふたりともショクだけが流れ星のように尾を曳いていた。

「待ってくれないか」

長い廊下を部屋へ急ぎながら、耕之輔は巨体に似合わぬ情けない顔をしていた。

扉の前まで来て、阿紀はやつと自分を取り戻した。

「そうですわね。私、十分ほど歩いて来ます。電話が続いているようでしたら、ドアは開けないで下さい」

それだけ言うと返事を待たずに引き返した。

エレベーターホールまで来て行き場がなかった。

他人の不幸の上におのれの幸せのないことを、阿紀は二十才の駆け落ちで痛いほど思い知っていた。

十五年前と同じ過ちを又やろうとしている。

ロビーを抜け、風の冷たい川端に立つと、遠い河口を佐渡行き汽船が出港して行くところだった。船も白い綿帽子をかぶっている。

あの船に乗って過去のない世界に住めたらどんなに気楽かと思う。

しかし、それにはもう耕之輔を愛し過ぎている。

信じられるものを信じるしかない。

部屋に戻ると扉が小さく開いていた。耕之輔は阿紀を迎えて抱きすくめた。

「どうでしたの？」

「清水と話が出来た」

「奥さま、ほんとに大丈夫でしたのね」

「ああ、発見が早くて、胃洗浄もうまくいったらしい。もうベッドで上半身を起こしてい

るそうだ。もつとも久美ちゃんからの連絡で彼が直接見たわけではないのだが」

耕之輔は改めて阿紀をソファに導き、無理に座らせた。

「嫌だろうが、落ち着いてくれないか」

「お茶を入れますわ」

阿紀は逃げるように立つと、バスルームへ行って水を汲み、ヒーターに掛けた。

「何処かで一度は話しておかなければならないと思っただけだ……」

「……」

「家内と僕とのことは、出来ることなら、君の耳には入れたくなかったが、逃げてばかりもいられない……」

耕之輔は先代と服部家との関係から話し始めた。先代が亡くなってからの服部家との関係、夫の作品を金に換算しなければ計れない妻の価値観。そして子供をなす、なさぬの夫婦の確執にまで及んだ。阿紀は黙ってそれを聞いた。

「もっと早く話しておくべきだったが、自慢出来る話でもないし、君との間に持ち込みたくなかったんだ」

阿紀は自分もわざと目をそらしてきたと思う。現実から逃げてはいけなないと思いつながら、二人の世界を純粹なものに保ちたかったし、今の幸せを壊したくなかった。しかし、現実には現実として越えねばならない。

「妻のやり方がどうしても許せないと思ひ出したのは、先代の遺品を勝手に処分していたのを知った時だった。親父の最高傑作と思っていた茶碗や水指数点が、ある数寄者の手に渡っていた。経済的にどうしても手放さなければならぬというなら、美術館に交渉する手もある。その上で引き取って貰う手もある。それを値段がいいというだけで業者の手に委ねてしまう神経。一度手放してしまつては、もう二度と手のうちようがないんだ。それが分からない妻じゃない……勿論、全ては僕に稼ぎがないからだ、というだろう。……しかし、僕が言っているのはそんな問題じゃない。もつと精神的な」

「でも、現実には奥様は奥様なんです」

阿紀は窓辺に立ってガラス戸越しに光る信濃川を見ながら言った。

「私のことを思つて下さるのでしたら、今直ぐに奥様のところにいらつして下さい」
導火線に火が点いてじりじりと焼けていく。このまま爆発すれば全てが終わりそうだった。

沈黙を破つたのは耕之輔の方だった。

「勝手を言つて悪いが、一緒に東京まで行つてくれないか」

「……」

「ね、そうしよう。話しておかなければならないことが山ほどあるんだ。そうしてよ」
話したいことがあるという耕之輔の思ひは理解出来た。新潟と良寛の遺跡巡りにとつて

あつた一日が新幹線の旅に変わったと思えばよい。

「分かりました。お供します」

「どうしてそんな丁寧な言葉使うの？」

耕之輔はまだ不安そうである。

「育ちがいいからじゃないかしら」

阿紀はわざとふざけてみせる。これ以上暗くしたくなかつた。

新幹線の屋根はかなりの雪を載せていた。

雪のせい時間か時間のせいか、グリーン車はふたりだけだった。

駅に向かうタクシーでも耕之輔は無口だった。耕之輔の視線は変に針が振れて落ち着かない。そんな手を阿紀はじつと握っていた。

「また何かやるかも知れない。そういう女なんだ」

「挑まれるんなら負けないんだけど」

阿紀は努めて明るく振る舞つた。

「奥様は私のことどんな風に御存知なんでしょう」

「僕が君に惹かれていることは知つている。多分、君の処に来たことも察しているだろう。君が訪ねてきてくれたこと、あの上布を雪晒しに預けたことも知つている。それくらいかな」

「……」

「これは言いたくなかったんだが……」

耕之輔の低い声が更に低くなっていた。

「家内は君の作品を京都で見たらしいんだ」

「私の作品を……？」

「お店のショーウィンドーで見て、求めたい風だった。君の作品をあの女に着られてたまるものか。君や君の作品が汚れてしまう」

耕之輔はその経緯を細かく語った。

「多分あの紬だという心当たりはあります。一昨年 of 展覧会に出品したものです。そういうこともあるのですね」

運命的なものを阿紀は感じた。

「けどショーウィンドーでお見掛けになったというのは何かの間違いです」

「……というところ？」

「私の仕事は少ないので、世の中には殆ど出回っておりませんの。地元で出入りしている業者も二社だけですし、その先の取引先も京都では一つしかありません。その問屋も路地うらで、表に飾り出したりする店ではないんです」

「というところ、買い手はどうやって手に入れるわけ？」

「その店が、顧客のお宅に伺って見て頂くのが普通ではないでしょうか。顧客先が呉服屋さんの場合もあるかも知れませんが」

「なるほど、ウィンドーに飾るなんてことはないわけだ。その店は何処？」

「河原町四条の近くで吉竹という店です」

「つまり、誰かの紹介でもない限り見る機会はないわけだね」

「普通はそうです。見て頂くのは展覧会です。私が思っている作品でしたら、伝統芸術展でお目に留まって、その吉竹さんにお買い上げ頂いたと聞いてます」

耕之輔の頭に閃くものがあった。初子の言動から察していたことが、突然現実味をおびて目の前に急浮上してきた感じだった。

「でもどうしてそんなことお訊きになりますの？」

「いや、ちょっと、気になったものだから……」

「お買い求めになったりしないで下さいね。これからは私が織って差し上げます」

阿紀は上目遣いに耕之輔を見ていた。

耕之輔は初子の自殺騒ぎに元々疑いを持っている。果たして本当にそんな事実があったのかどうかさえ疑っていた。耕之輔をおとしめるための服部家の策謀ではないかと考えたのだ。それは電話で聞いて最初に閃いた直感だった。

越後湯沢で大勢のスキー帰りらしい客が乗ってきた。

「……スキーはやるの？」

「雪国ではスキーが出来なければ生きてはいけませんわ」

「そうだね、馬鹿な質問だ」

話さなければならぬことが山ほどありながら、結局は意味のないそんな話になってしまふ。

耕之輔を信じて待つしかないと思いつつながら、京都に何が待っているのか、やはり心配だった。

「信じて待っていていいのね」

京都は朝から底冷えした。

まだ頭の芯がはつきりしない。薬のせいとか動き始めに目まいがひどかった。

初子はベッドから窓枠に四角く区切られた東山の稜線を眺めるともなく眺めていた。

死を考えた自分が嘘のようでもあり、他に道はなかったようにも思える。自分で自分がよく掴めなかった。

「どう、みかんでも食べてみるかい？」

正枝がテレビの前から首だけ捻って訊いた。

「いいわ。それよりテレビの音、少し小さくしてくれない？」

「頭に響くのかい」

正枝はテレビを切ると、初子の枕元にやって来て点滴の目盛りを確かめる。

「今日の看護婦、点滴の落ちが悪いね。新米かしら」

初子は返事をするのもけだるく現実がまだ薄皮を被っている。

正枝が溜息をついた。

「よりによってこんな時に……十年以上兆候ひとつなかったんだろ。……どう思ってるの、あんた」

この医院に緊急搬送された折りの検査から判った妊娠だった。正枝は当然耕之輔の子供だと思っている。初子の霞んだ頭ではこれから起こってくる様々を思うだけで複雑すぎた。

正枝はさらに大きな溜め息をつくとき、時計を見た。

「早いところこの病院ひき払いたいだけど。古臭くて窓も小さいし……看護婦は小生意気なのが多いし……。近くの病院なら動けるだろ？」

正枝の頭は周囲の視線から一刻も早く逃げ出すことらしい。

「病院から許可はでてるの？」

「そんなもの、こっちで決めればいいんだよ。病院を移るだけの話だもの……」

その頃、院長室では午前の外来診療を終えた小太りな院長が未決箱から取り出した書類を手にメガネの事務長と話していた。

「やっぱり偽名だったか！」

「保険証出さないわけですわ。最初から京都じゃないとは思いましたけどね。……でもキヤッシュの前払いですから心配いりません。……それにしてもとんだ救急引受けたもんです。……家族も感じ悪いし」

「克蘭ケの悪口はいかん」

「院長はおっしゃいませんからね」

「私のは批評だ」

「これが昨日山口から送ってきた保険証の写しです」

軽く受け取った院長の目の色が変わった。

「山口県か。……長門湯本……坂戸耕之輔……！」

「……？ ご存じの方ですか」

「……うん、いや知らん」

院長の額に深い八の字が刻み込まれていた。

「旦那は来とらんのだな」

「何だかもめとる様ですな。今朝もお袋さんカンカンでしたから」

「……坂戸耕之輔……か」

睡眠薬を飲む寸前、初子は美杉に電話を入れている。が、美杉は不在だった。

浅谷窯を出る前、初子は美杉に耕之輔との経緯を電話した。美杉の態度はその時から冷たかった。彼にしてみれば煩わしいことになったというのが正直なところだろう。元々そういう仲なのだ。京都に来ることに美杉は反対だった。その反対を押してやって来たのだが、今度は電話にも出てくれない。耕之輔への嫌がらせと美杉への腹いせが初子の中で交錯した。或いは妊娠の兆候が精神的バランスを崩させていたかも知れない。そんな自殺未遂だった。

美杉には直前の電話で、このままでは大変なことになる、とやや強迫的な伝言が入れていた。彼の事務所の女の子が握りつぶしたとも思えない。なのに美杉は未だ現われなかった。

いずれにしても、妊娠がはっきりしたのは、事件後この病院に運ばれて処置のための検査からであった。分かってみると、強迫的な電話が悔やまれた。

初子が待っているのは耕之輔ではなく、やはり美杉だった。来てくれれば何とかかなるというものではなかったが、躯が美杉を求めていた。

初子には思い当たる夜があった。

上七軒の宿でいつものように美杉と濡れた夜、ふと彼の子を抱く自分を思い描いたのである。

美杉とは肉の繋がりに過ぎないと割り切りながら、いつか嫉妬したり愚痴を言ったりし

ている自分を意識して可笑しく思うことがある。軀の深まりが思いの芯へ浸透していくのだろうか。肉の馴染みが調味料のように心まで染めていくのかも知れない。

そんな場合、心は軀の芯のように思われた。

彼女は最初、浅谷窯の維持のために美杉に近づいたと自分に言いきかせてきた。彼女の欠点はそれを耕之輔や浅谷窯のせいにして、自分を被害者の位置に置きたがる点にある。自分を内観しようとする意思はない。それが自分への「甘え」であることにさえ気づくうとしなかった。

何時ものが、何時ものように繰り返されていく中で、その夜初子は初めての経験を持った。

それまで耕之輔や美杉との間に知っていた、当然こんなものという頂点をその夜は越えていた。越えるというより色の厚味が違ったといった方が当たっているかも知れない。自分が知っていることが全てと考えがちな彼女にとって、その夜の遊泳は、未知の世界への驚きであった。

快楽を基点としてきたものが、生殖本来の祈りの姿に深められた感さえあった。

この後、初子の方から美杉に対して優しい気持ちになれるのは珍しいことである。

初子は子供が欲しいと切実に思った。

夫から子供を産むことを拒否された妻の行き場のない本能がそんなことを思わせただけか。今、はつきりしない意識の中で美杉を求めているのを、初子是不思議な神の意志でも見るように振り返っていた。

朝は晴れていたのに、昼を過ぎると高雲りだった。高台寺山の稜線だけが見える窓枠に、一本だけ松がいびつにその幹と頭を出している。初子はいつか、それを耕之輔に見たてていた。

あの松は太陽を遮り、土の養分まで吸い上げて寄り添う灌木を枯らしてしまったことに気がついていだろうか。

耕之輔へのこだわりは、そんな自分を駄目にした男への恨みと想った。しかし、越後の女との仲を嫉妬するのは何故だろう。耕之輔への嫉妬には血のたぎりはない。美杉へ向けられる嫉妬には逆巻く肉の痛みがともなった。

個室に親子ふたりで、終日顔を見合わせているのは久しぶりのことだったが、別に話すこともなかった。互いに相手を計り合って迂闊なことも言えない。

「一寸、売店へ行ってくるけど何かあるかい？」

「母さん、電話して変な工作なんかしないでね」

「私が何をするというの。お父さんにあなたの様子を報告しなきゃいけないでしょ。お父さんだってそれは心配してなさるんだから」

それならこの電話を使えばいい、と言いかけて初子はやめた。空気が変わるだけでも有り難い。

どう言ってみても、この母ならやることはやるだろう。

早晩、だれの子供かは分かる時がくる。今一番に連絡をとらなければならないのは美杉であった。

正枝が出て行くと、初子は個室の電話を使って彼の事務所に連絡しようと、起きようとした。

部屋の扉がノックされたのはそんな時だった。返事がないので、そつと扉を開けて覗いたのは美杉だった。

「ひとりかい……」

「今、電話しようと思っていたところよ」

そう言おうとしたが、急ぐとまだ舌がもつれた。

「また、何て思い切ったことをするお人や」

言いかけたところに、正枝が戻って来た。

「何ぞ御用でしょうか」

廊下から、個室に入る美杉を見て、引き返して来たらしい。

「母です。京都でお世話になっている美杉先生」

初子は交互に見ながら引き合わせた。

「過労でお倒れになったと聞いてびっくりしました。でも、お顔の色もおよろしいようで、安心しました。丁度お電話頂いた折にたまたま居なくて、遅なってしまうて何のお役にも立ちませず申し訳ありません」

後の方は初子に向いての言訳だったが、初子には実のあるものとは思えなかった。

「これほんの気持ちだけですけど、何か果物でも買ってあげてください。どんなことからしませんよって、失礼とは思いましたんですけど」

美杉がアクセントのおかしい標準語を使うのを初子は目を閉じて聞いた。

「御心配頂いて、恐れ入ります。娘から何時もお噂は聞いております」

正枝も余所行きの言葉を並べている。

「お母さん、何か飲み物でも買ってきて」

初子は早く美杉にお腹の子供のことを言いたかった。

正枝が出て行くのを待って、

「どないしたいのや」

美杉が屈み込むようにして小声で訊いた。

「ドアを閉めてきて」と頼む。

案の定、正枝は扉の外で聞き耳を立てていた。

「悪かったな、生憎留守してて。びっくりするがな。何があったっちゅうのや」

「驚かないでね。……赤ちゃんが出来たのよ。あなたの赤ちゃんよ」

美杉の眉間に一瞬険しいものが走るのを初子は見逃さなかった。

「言ったでしょ。耕之輔とはあるはずもないの。……なのに居留守使うんだから」

「……だから薬飲んだって言うのかい」

「それは後で分かったこと。……あなたは冷たいし私……どうしていいんだか……」

「間違いないんやろな。……いや妊娠しとるいうの」

「血液検査で分かったの。……もう逃げ出せないわよ、センセイ」

美杉は窓辺に立って顔が見えない。

「ま、その問題はゆっくり考えよう。……お母さん、何時まで京都に居はるのや？」

「さあ、……どうして？」

「うむ、いや。……相談するにしてもやなあ……お母さん、それ知ってはるんかいな？」

「言って欲しい？ ……貴方の子だとは言ってないわ。言えることじゃないでしょ」

初子はその内に段々腹立たしくなってきた。

「私、貴方の奥さんにして欲しいなんて言うつもりはないのよ」

「……それで？」

かなりの間があつて美杉が言った。

「赤ちゃんは産ませて頂きます。私の赤ちゃんでもあるんですから」
きつぱりと言っていた。そんなに強い言い方をするつもりはなかったのに、口に出すと強くなっていた。

「だから、まあ……それについては又……」

美杉にとっては突然降って湧いた天災なのかも知れない。身を立て直すのが精一杯らしかった。

「だから、つまり、それについてはゆっくり相談しようと言ってるじゃないか」

「ええ、お願いします」

どうしてこう切り口上になつてしまうのだろう。心のささくれ立ちがそのまま出ている。そう思った時、初子の目に初めて涙が込み上げてきた。

「御免なさい。こんなこと言うつもりじゃなかったのに……」

「分かっているよ」

「私には貴方が一番の薬なのよ、栄養なのよ。分かる？ 貴方が来てくれるのが……分かる？」

「ああ、分かった」

正枝が売店から帰ってきた。

「何にもないの。こんな物でよかったかしら」

「どうぞ、お構いなく、すぐに失礼しますから」
後は正枝と美杉のとりとめのない世間話になっていた。初子は目を閉じて黙ってそれを聞いた。

先刻から頭が脈打ち出している。興奮から血圧が上がったのかも知れなかった。今に又あの頭痛がくるだろう。

耕之輔が目を覚ましたのは浜名湖の辺りだった。

余程疲れていたのだろう。新横浜を通過したのは知っていたが、いつか寝入っていたらしい。

阿紀と別れてきた思いが鼻孔の奥に切実に響いていた。いくら椅子に寄っても肩の辺りが頼りない。

阿紀は今頃どの辺りだろう。東京駅ホームでの阿紀の真つ赤な目が思い出されて胸がつままった。

それでも列車が名古屋駅を発つと、やはり京都のことを考えないわけにはいかない。あと一時間もすれば着くのである。

睡眠薬を飲み過ぎただけと言いながら、岳父は電話の向こうで「人殺し！」と怒鳴った。確かに夫として落ち度も至らないところも多々あるだろう。しかし、夫婦仲も最初から

悪かったわけではない。初子とも何度か話し合ってきた。

服部家にも度々アタックを試みて、結局分かったのは、初子の意見はすべて服部家の考え方であり、すべて実家の言いなりだということだった。

朝起きて姿が見えず、実家に訊くと京都に発っていた、というようなことが何処の夫婦にあるだろう。

一度などは、そう言いながらまだ服部家にいたこともあった。

なかでも耕之輔が最も我慢出来ないのは、京都からの帰りが遅れる言い訳に、彼の作品が売れないことをあげつらうことだった。

電話口で「売れないなら帰るより仕方ないだろう」と怒鳴ったこともある。
耕之輔は色々に武装して萎えそうになる心を支えた。

清水の話では義母の正枝が看護に発ったという。明信でないのがせめてもだが、来るべき時が来た思いは同じである。

列車が鴨川の鉄橋を渡ると、耕之輔の覚悟もおのずと決まっていた。

京都駅八条口は他人の顔をしていた。しばらく来ないうちに改装されたくらく案内所や売店なども耕之輔の知っているのとは別人の顔をしていた。

「高台寺下の津坂病院……」
タクシーを拾い、電話で聞いていた病院を言ったが、運転手は知らなかった。

「近くへ行けば分かりますか」

「いや初めて行くんだ」

「分かるかなあ、無線で訊いてみましようか」

「いいよ。近くまで行つて貰えれば自分で捜すから」

会つてどういう顔をすればいいのか、ここまで来てまだ定まっていな

津坂病院は直ぐに分かった。古い洋館の縦に長い窓に特徴のある四階建ての個人病院だった。

受付で訊くと部屋は四階の奥とすぐに分かった。

間口に比べ奥行きはかなり深かった。四階の廊下を突き当たりまで歩く間、スリッパがペタペタと鳴った。

個室の扉は硬かった。その音に正枝が顔を出した。

「遅くなりました」

正枝は返事の代わりにふいと横を向いていた。

初子はベッドで天井を向いたまま動かない。

耕之輔は何か言わなければと思いつながら言葉が見つからない。三人がそれぞれの思いの中で白けていた。

「コートくらい脱いだらどうなの」

正枝の声が震えていた。言われて耕之輔は初めてポケットから手を抜いた。

「何の御挨拶もないの？」

催促されて耕之輔はやつと妻に声を掛けた。

「どうしたんだ？」

耕之輔の陳腐な台詞に初子は壁に向かって寝返つただけだった。長い沈黙に耐えられないように正枝が口を開いた。

「結構な御挨拶なこと。これでも夫婦なのかねえ。……何処から引き返してきたの？」

「新潟です」

耕之輔は隠さなかった。

「まあまあ、それは御苦労さまでした」

それでも耕之輔は黙っている。

重い沈黙を破ってくれたのは早い配膳の明るいアナウンスだった。

「今夜、ゆっくり話します」

「私は聞きたくありませんよ。お父さんだってそりや怒っていなさるんだから」
「そうでしょうね」

耕之輔の言葉は大人しかったが、開き直った感すらある。

「お母さん、帰って貰つてよ」

初子が初めて口を開いた。彼女が最も恐れているのは正枝の口から不用意に妊娠の話が出るからだ。いざれ分かるにしても、少しでも長く耕之輔を苦しめておきたい。それが初子のせめてもの復讐だった。

「もう退院できると思うの。訊いてみて頂戴。ここ感じ良くないし……」

正枝に言われ耕之輔は個室を出てナースセンターに行った。

「担当の先生にお会いしたいのですが……」

「ご主人さまですね。院長がお待ちしております」

意外な展開だった。院長室を訊くと若いナースは直ぐに連絡してくれ「係りの者が迎えに参ります」という。義母のいう感じと違っていた。

院長は還暦を過ぎた丸顔の男だった。耕之輔が「ご迷惑かけました」と挨拶をするのに、人懐かしく受け止め笑顔である。

「ま、何ごともなくて宜しかった」

とナースを振り返り領いている。「どうだ、俺の言った通りだろう」と言う顔だ。院長の話では元々致死量には隔たりがあったらしい。

「しかし、あの薬は常用しない方がいいんですがね」

「お恥ずかしいですが、知りませんでした」

「ところで、一応の処置は終わりましたが、これからどうしなさる？」

耕之輔は相手から先に切り出されホツとして正枝たちの退院の意思を伝えた。院長も簡単に了承してくれた。

「お帰りになれば係り付けの医者もおありでしょうから……それとも京都の病院を紹介しますか」

耕之輔には正直に答えるしかなかった。

「事情がありまして、今の私には殆ど発言権がありません……」

「……らしいですな。聞きました。……ところであんた囲碁はなさらんですか」

「はあ？ 囲碁と言いますと……」

間髪をいれず側のナースが遮った。

「院長センセイ！ 往診があります」

院長は酒脱に笑い、わざとらしいウインクを返してきた。「これだからね」という目だ。耕之輔は好意以上のものをこの院長に感じていた。

「お互い苦労しますな」

この二人夫婦なのだろうか。それにしても年齢差があり過ぎる。

「ところで美杉さんとはお古いの？」

「美杉さん？ いえ、私には……」

「あそう、そんならいんです」

四階の個室へ戻ると待っていたのは正枝の話合い拒否の宣告だった。

「お話があるのなら帰ってお父さんにして頂戴。あたしも疲れてるの。まさか『橋』に泊るんじゃないでしょうね」

「いけませんか」

「断るように橋にも言っておるわ」

「じゃ、余所を探します」

それは耕之輔にも好都合だ。

病院を出ると外はもう真っ暗だった。高台寺下から祇園に向って歩きながら耕之輔の頭はむしろ清々していた。ここまで来れば迷うことなど何もない。服部家と縁を切って阿紀との道を進むだけだ。気がつくとい坂神社の側にきていた。急に空腹を覚えて馴染みの鮎屋の暖簾をくぐっていた。

「これはお珍しい。お久し振りのご上洛ですか」

主人は明るく迎えてくれた。先代の器作で揃えられている。式台の向うの棚にビッシリと並んでいる前に座って耕之輔は思わず涙ぐみそうになっていた。自分を不義の子と知りながら可愛がってくれた父がそこにいる。

「冷やでいきますか、カンにしますか」

「取り敢えず冷やで……それから何か腹の足しになるものを頼む……」

「畏まりました。……こここのところ、奥様にご最戻になっております。先日も美杉先生とお出かけ戴きましたばかりです」

「美杉……？」

先刻も院長室で出た名前だった。

「和服の方で有名な……美杉春彦先生ですよ」

主人は屈託がない。

和服と聞いて耕之輔は阿紀の着物の話を思い出していた。

この夜、耕之輔は久し振りに悪酔いした。主人にホテルの予約を頼んだまでは覚えていたが後は全く記憶がない。目を覚ましてもここが何処だかさっぱり分らない。鏡前の案内を見て河原町四条裏手のビジネスホテルと知れた。

とにかく阿紀に電話しなければならぬ。

「そのお声、お飲みになったのね。昨夜の内に電話あるかと待ってましたのよ」

「御免……時間が時間だったものだから……怒ってる？」

「あきれれます。……夢を見ました。お腹をすかしてうなってるの」

「誰が……？」

「さあ、誰でしょう。夢だから忘れたわ」

耕之輔は昨夜聞いた美杉なる男の名を思い出していた。

「昨日、東京へ向かう新幹線で言っていたね。君の作品が置いてある呉服屋……」

「吉竹さん……？」

「吉竹か……確か河原町四条だと言ったよね」

「そうですけど、どうして？」

「いや、この近くだな、と思って」

「いらっしやっても無駄よ。ほんとにウィンドーなどない横町のしもた屋ですから
屋号さえ確認できればそれでよかった。

その前に津坂病院へ行かなければならない。

冷蔵庫の缶コーヒーを飲んで清水に電話を入れると、出たのは意外にも久美子だった。

「こんなに早くどうしたの？」

「清水さんに朝のお弁当持ってきたの」

「それは悪いなあ」

「お義兄さん、今何処なの？」

「京都だよ。京都のホテルから掛けてる。清水いるかい？ いたら代ってくれないか」
一瞬の間があつて、

「早く帰っていらっしやった方がいいわ」

と早口な久美子の声が出た。声を殺した言い方だ。代って出た清水も同じことを言った。

「どういうことだ。何か起こってるのか？」

「ええまあ。……出来るだけ早く帰ってきて下さい」

明信が来ているのに違いない。

朝の病院は変に湿気を感じさせる蒸し暑さだった。ベッドを載せるための長方形のエレベーターは変に不吉なものを予感させる。

四階で降りると、廊下の正面の縦窓から朝日が白けるほど長く伸びていた。

耕之輔が重い足どりで個室に向かいかけた時、扉が開いて出てくる人影があった。

背の低いずんぐり太った男だ。男は背広を着ていたが、如何にも和服を扱いそうな男に見えた。

男は擦れ違ふ時、耕之輔に深すぎる会釈をした。ポマーダの強い匂いに美杉だな、と直感した。

耕之輔からはかなり見下す背の低さである。

扉の前で振り返ると、男も振り返ったところだった。

初子はガウンを着て窓辺に立っていた。正枝もチラと耕之輔を見たまま口を開けない。

「気分はどう？」

「……」

「どうぞ、お引き取り下さい」

代って正枝が答えた。昨日と違って沈んだ言い方だった。

「どうぞ、お引き取り下さい」

正枝は同じ言葉を繰り返した。

取り付く島がないとはこういうのを言うのだろう。正枝は涙さえためているようであった。

「退院出来そうかい？」

耕之輔は初子に水を向けたが、初子は背中を見せたまま、擦り抜けるようにして個室を出て行ってしまった。

正枝の様子が一変したのは、初子の妊娠を、それも美杉の子供であることを知ったショックからだだったが、勿論耕之輔に分かるはずもない。

耕之輔は仕方なく個室を出て会計に顔を出し支払について聞くと、又、思わぬ展開が待っていた。『院長に会ってくれ』という。しかし、その院長は昼まで外来で無理だという。表に出ると、河原町四条に向かっていた。

冬の空は晴れわたっていたが、その分鴨川の風は冷たい。

開けたばかりの喫茶店に入り、電話帳を借りて調べると呉服卸「吉竹」の住所はすぐに分かった。

表通りを三条に向け五十米ほど先の路地を右に折れると、その家はすぐだった。

教えてくれたのは、先刻病院で擦れ違った男だった。

耕之輔が見たのは、軽く頭を下げて格子戸を出てくる美杉である。かなり隔たっていたが体型から直ぐに先刻の男とわかる。オーバーの衿を立てる仕草にも和服を扱う者の習性がしみついていていた。

美杉は歩きかけ、耕之輔を認めて、一瞬戸惑い、逆に歩き出そうとしたが、それもわざとらしいと思ったのか、短い首を衿に埋めるようにして近づいてくる。

耕之輔もそのまま歩いて行った。

この野郎、今度も擦り抜ける気か。

至近距離に迫った時、耕之輔は脚を止めていた。

「美杉さんですね」

思わず威圧する言い方になっていた。男は答えない。

美杉の目玉がキョロキョロと短く動いているのを確認すると耕之輔はすぐ横を擦り抜けていた。

耕之輔はそのまま振り向かなかった。暫くして小走りに駆け去る足音がした。「吉竹」は阿紀のいう通り、いかにも京都らしいしもた屋だった。格子戸に格子窓で壁板の焦げた感じが如何にも時代物だ。

格子を開けると暗い奥でベルが鳴るのが遠く聞こえた。

「はいよ」

意外に近く、すぐの襖から男の顔が現われた。

「こちらに小千谷の藤波阿紀さんのお作があると伺ってきたのですが」

坊頭の主人らしい男は狐につままれたようにキョトンとしていた。

耕之輔が改めて名刺を差し出すと、やっと正気に戻ったように口を開いた。

「不思議なこともあるものですね。ほんの今、キャンセルが出て、困っていたところですよ」

「キャンセルですか」

「ま、お掛け下さい。実はさるお方から頼まれてまして、もう仕立てに出ているのです。まだだったらい寸待ってくれないかと、それもほんの今……」

「美杉さんですね」

「よく御存知で……。これから縫い子さんの処に電話しようと思っていたところですよ」

高台寺下の病院へ引き返ししながら、耕之輔は次第に覆ってくる空ろな気持ちをもて余していた。

「あれを観ておこう」

耕之輔はひとりごちて角屋の前の信号を北へ渡った。正面に見える「何必館」と書かれた間口の狭い美術館には香月泰男の作品が常時一、二点は陳列してある。

傾きかけた心を立て直すには香月泰男に会うのが一番だった。

香月の作品は以前にも見た、艶を消した墨色の上に三日月を描いた絵だった。耕之輔はその前で祈る気持ちになっていた。何を祈るでもなかったが、経緯を報告して香月に許しを乞うていた。

三階に上ると山口薫の部屋になっている。入った処に詩が貼ってあった。

小雪さらさら

どうにかなるだろう

耕之輔は何度も口の中で繰り返しながらホテルへ戻ってきた。

午後の列車で発てば夕方には長門湯本に着ける。

部屋に入ると、自然に電話に向かっていた。

阿紀はなかなか出なかった。諦めて切ろうとした時、やっと掛かった。

「仕事申中だった？」

「いいの。いざり機に座っている時は、出るのに少し時間がかかるけど我慢して下さい。

……今どちらから？」

「まだ京都だけど、午後の列車で山口に帰るよ」

「もう退院なさって大丈夫なの？」

「帰るのは一人だよ。それより、今、香月泰男先生の絵に会ってきた。その美術館に山口

薫という画家の詩があつてね。……小雪さらさら、どうにかなるだろう……」

「もう一度教えて……」

「小雪さらさら、どうにかなるだろう」

「小雪さらさら、どうにかなるだろう」

電話の向こうで阿紀も繰り返していた。

「今、こちらは小雪さらさらよ。起きた時からずっと同じように降っているの」

「そう。そんな中で、機に向かっているんだ」

「ひとり寂しくね。……ウソよ、私の中には誰かさんがいますもの」

「ありがとう。そう言つて貰うと元気が出るよ」

「奥様と……？」

「家内は僕には口も利かない。彼女の父親と話すことになるだろう。でも、心配することはない、言うだけのことを言うだけだ」

「……小雪さらさら、どうにかなるだろう」

「そう、どうにかなる。長門湯本に帰ったらまた電話する」

「列車でゆっくりお休みになれるといいけど……」

電話を置くと阿紀は窓辺に立つて行った。

白一色の世界に小雪は相変らず音もなく沈んでいた。

「小雪さらさら、どうにかなるだろう」

耕之輔は何も言わなかったし、阿紀も避けてきたが、今一番考えなければならぬのは、耕之輔のこれからのことだった。浅谷窯が妻の実家に負うところが大きいのは話の端々に出ていた。彼は別れると言っているし、事実そのように動いてくれている。しかし、別れた後どうなるのか。浅谷窯は？ 負債は？ それが彼にどう覆いかぶさってくるのか、具体的には全く分かっていなかった。愛という名の元に私は、耕之輔の陶芸家としての命を断とうとしているのではあるまいか。

東京駅で別れてからずっと考えているのはそのことだった。

私は耕之輔のことを考えているようで、実は一番耕之輔の脚をひっぱっているのではないまいか。窮地に追い込んでいるのではないか。

雪はレースの幕を下ろすように降り続いていった。

耕之輔は、八坂から高台寺下へのだらだら道を上りながら、機に向かう阿紀の姿を思い浮かべていた。

小千谷で見てきただけに、小雪の降りしきる周囲の情景まで想像出来る。静寂の雪の中に、トン、トン、トンと横糸を締めるリズムまで聞こえてくるようであった。

昼になっても院長の診療はなかなか終わらなかった。待合室のベンチで待っていると、

院長は直接外来の診察室から現われた。皮のジャンパー姿である。

「道の向こうに安くて旨いトンカツを食わせる店があるんだ」

如何にも親し気な言い方だった。

そのトンカツ屋はいかにも大衆食堂という感じで、客もタクシーのドライバーが目立つ店だった。

院長はカウンターに割り込むように座ると、

「いつもの二つ。いいだろあんたも同じで？」

と有無を言わせない。

「あんたが来るのを待ったんだよ」

「遅くなって申し訳ありません」

「なんだってネ。越後に女が居るんだって？」

耕之輔はムツとしてにらみ返していた。

「あの親娘を見ると無理もないと思うが、ま、そんなことは私の知ったことじゃない」
辺り構わぬ蛮声に耕之輔はへき易したが、大勢の声に消され誰も聞いている風はない。

「ところでどうするね奥さん」

耕之輔には何を訊かれているのか分からない。

「高齢出産ということもあるが……僕は考えた方がいいと思うんだ。……それにあんなこ

とがあつた後だし」

「待って下さい。妊娠しているということですか」

「なんだ。まだ知らんのかい」

「……！」

耕之輔には衝撃であつた。他の男と通じていたということより、初子がそこまで子供を欲しがっていたのか、という衝撃だった。

「これは医者というより、お父さんの友人としての意見だが……」

「えっ、父を御存知なんですか」

「そうだよ。囲碁では随分お相手させて貰った。最初は碁会所で会って、京都に来られる度に……」

「そうでしたか。ひとり碁盤に向かっている父はよく見かけましたが……」

「あんたは確かA型だったよな血液型？」

「そうです。それも父から？」

「知ってたんだね、あんたも？」

津坂院長が初めて見せるしんみりした顔だった。

「誕生のことは、中学に上がる頃には知っておりました」

耕之輔は正直に答えた。

「父が先生に相談申し上げたのでしょうか」

「お父さん、あなたのことはえろう気にしておられた」

そこにまだ油が小さく飛び跳ねているトンカツ定食が現われて話は中断された。

舌を焼きそうなトンカツにたっぷりついた洋芥子を塗って耕之輔は余りの辛さに涙しながら食べた。

院長も額の汗を拭きながら食いついている。

「どうだ、うまいだろう」

「父もこれを食べたのでしょうか」

「だから連れてきたんじゃないか。負けた方がおごる約束で、お父さんには随分おごらされたもんだ。その敵討ちじゃないが、今日はあなたのおごりだぞ」

「畏まりました。よろこんで……」

耕之輔は久しぶりに温泉に浸っているような平安を覚えていた。

先代の話に戻ったのは帰りに寄った喫茶店だった。

津坂院長の話では、十年ほどの付き合いだったという。清水坂の碁会所で偶然会い、互いに何か認め合うものがあつたのだろう。定宿が同じ高台寺下ということもあつて、先代が京都に出てくる度に碁盤を囲む仲になったという。

「お父さんの碁は奇麗な碁だった」

院長は思い出すようにしみじみと言った。

「先刻の話ですが、……血液型の違いで父も知っていた筈です」

「勿論知っておった。お父さんは自分で自分に誓いを立てられたんだ。生涯、口には出さない、と。……何故だと思う？」

「僕もそのことはずっと気に掛かっていました。教えて下さい」

「あなたが可愛かったからさ。お父さんはあなたを真から愛してたんだよ。間違いから生まれたあなたをだぞ。……この気持ち分かるか！」

院長も心なしか興奮しているように見えた。

「それがお父さんの悦びでもあり、悲劇でもあつた、とわしは思っておる。何しろ業のすべてを自分の中に封じ込めてしまったんだからな。墓の中までだ。……いや、それだけじゃないかも知れん。家にも幾つかお父さんの器を頂戴しとるが、わしはあれを見とると涙が出てくるんだよ。お父さんという人は、土のなかに自分を封じ込めてきたんだ。あの茶碗や皿の一つ一つに押し込めて生きてきたんだよ。あだやおろそかに出来たものじゃないぞ。……あなたにお父さんの真似が出来るか!？」